

2024年のビワマス引縄釣りの資源への影響

大前信輔

1. 目的

遊漁を中心に近年盛んになっているビワマス引縄釣りの資源への影響を把握するため調査を行った。

2. 方法

引縄釣り捕獲魚の年齢・体長組成を調査し、刺網漁獲魚と比較した。また、琵琶湖海区漁業調整委員会事務局の調査による2023年12月～2024年9月の捕獲量(漁獲量および遊漁による採捕量)と別途調査による資源構造¹⁾から引縄釣りの資源への影響を評価した。

3. 結果

漁法別年齢組成を表1に、体長組成を図に示す。捕獲魚の漁法別の平均年齢、平均体長は刺網が2.8歳、43.2cm、引縄釣りが2.1歳、36.8cmであり、後者が若齢で小さかった。2024年の引縄釣り捕獲魚は、全長30cm以下の採捕が禁止となった2017年から2023年までの引縄釣り捕獲魚の平均年齢(2.2歳)と平均体長(37.6cm)をわずかに下回った。

2024年の刺網漁獲量は12.8ト、引縄釣り捕獲量は28.4ト(漁業：11.8ト、遊漁：16.6ト)となり、引縄釣りが前年に引き続き刺網を大幅に上回った(表2)。引縄釣り捕獲量は2020年以降、著しい増加を示したが、2024年においては前年より約10ト減少し、特に遊漁による採捕量は前年より大幅に減少した。これは、資源管理を目的にR6-7シーズン(2023-2024シーズン)のビワマス承認制度にかかるプレジャーボート承認者数が前年に比べておよそ半数に制限された影響と考えられた。

滋賀県漁業協同組合連合会が実施する親魚

からの採卵事業において、10万粒の採卵に要した日数は0.69日と前年から大幅に短縮したことから、親魚量は少なくとも前年並みには存在したと考えられた。

2024年のビワマス資源量は高水準にある¹⁾。また、2024年10月～11月に採捕された回帰親魚の年齢組成では、引き続き、3歳以上の割合が多く、資源構造の若齢化は見られない²⁾。このことから、引縄釣りの資源への影響は抑制できたと考えられた。

表1 捕獲魚の漁法別年齢組成(%)と平均年齢

漁法\年齢	1	2	3	4	5	平均年齢
刺網	4.2	34.1	41.5	16.5	3.7	2.8歳
引縄釣り	20.2	51.3	23.3	4.8	0.4	2.1歳

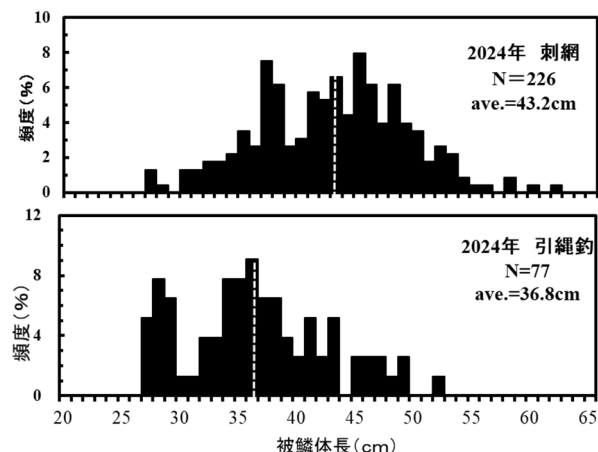


図 漁法別採捕の体長組成 (図中の破線は平均)

表2 漁法別目的別採捕量の推移 (琵琶湖海区漁業調整委員会事務局調べ)

西暦年	捕獲量 トン(%)				合計
	刺網漁業	引縄釣り漁業	引縄釣り遊漁	引縄釣り合計	
2017年	18.4(57.9)	4.7(14.8)	8.7(27.4)	13.4(42.1)	31.9(100)
2018年	9.2(45.5)	3.7(18.3)	7.3(36.2)	11.0(54.5)	20.1(100)
2019年	27.2(65.9)	5.6(13.4)	8.5(20.6)	14.1(34.1)	41.3(100)
2020年	26.7(54.3)	7.6(15.5)	14.9(30.2)	22.5(45.7)	49.2(100)
2021年	22.1(41.5)	8.5(16.0)	22.6(42.4)	31.1(58.5)	53.1(100)
2022年	25.2(46.6)	7.2(13.3)	21.7(40.0)	28.9(53.4)	54.1(100)
2023年	12.7(24.7)	9.4(18.2)	29.4(57.1)	38.8(75.3)	51.5(100)
2024年	12.8(31.1)	11.8(28.6)	16.6(40.3)	28.4(68.9)	41.2(100)

本研究は水産庁からの委託事業「水産資源調査・評価推進委託事業」の一部として実施した。

- 引用文献 1) 大前(2026)：ビワマス資源量の推定と評価(2024年)，令和6年度滋賀県水産試験場事業報告(本誌)。
 2) 大前(2026)：ビワマス資源の年齢・体長組成(2024年)，令和6年度滋賀県水産試験場事業報告(本誌)。